

---

## 探検家にも冒険家にもなれなかった男の自嘲

徳 田 隆 一

---

探検する行為って何だろう……。旅行でもレジャーでもなし、さりとてスポーツでもなし。そのようなものを、探検と呼べば、余りにもあいまいか。胸わくわくするでもなし、さりとて爽快感が伴うものでもなし。そのようなものを探検と呼べば、一体誰が行なうのか。

かの大航海時代の探検は、その時代のあらゆる価値感を、牛耳ったに違いない。しかし、それを思い出すのは、死んだ子の年を数えるようなものであまり意味がない。それじゃ今はどうなのかというと、いろんな価値感が、割りと仲よくやっていると、いう複数価値共存の時代と呼べるのではないか。

そのような中で、探検する行為は決して非難されなくなったらしいが、決して称賛されなくなつた。なんだか難しい。しこしこやる以外方法は見つからぬ。ひきょうだが、自分だけを信ずる事の原点に逆る。

現在の私は、学校を卒業したと同時に、あこがれの冒険族をも卒業したらしい。それも全単位不可なりで。しかしあこがれの冒険族なんて苦しいって事だけの裏返し。それを気にするのは時間のむだというもの。

あこがれから本当の冒険族に、華麗な変身。ただその範中が自然社会から人間社会に変わるかも。でも何となく負け犬の遠ぼえみたい。(OB)

---

## 一人の山 二人の冬

四 方 立 夫

---

### 山 一 人

山とは、自然と己の知恵比べであり、己自身との戦いである。そして、その戦いの過程が、自分にとって唯一の経験であり、自己形成である。そう考えれば考える程、又、信じれば信じる程、単

独行以外の山へのアプローチは、自己と山に対する欺瞞でしかない様に思われて来た。

暇と金を算段しこれを目指さなければならなかつた事から、ロジカル・クライムが実動より先行したのはある程度当然の成り行きでもあつた。そうした机上登山の中からあみ出された、幾つかの